

# 人文フォーラム

32

2010.3



## CONTENTS

### 巻頭言

退任に当たって 人文学部長 追塩 千尋……1

### 別れのあいさつ

転換期の世界 大塚 秀之……2  
さらなる発展を 栗原 豪彦……3

### Essay

〔時評〕ハイチの大震災と「植民地責任」 浜 忠雄……4

### 国際交流レポート

韓国大田大学校への2度目の研修体験 菊池 有佳子……6  
私の留学体験記 趙 美賢……7  
カナダ・レスブリッジ大学交換留学記 金田 真美……8

2009年度レスブリッジ大学

夏期日本語コース報告 神谷 順子……9

2009年度サハリン大学学生交換事業

夏期海外研修報告 寺田 吉孝……10

第41回全道ロシア語弁論大会 ……13

### ゼミ室紹介

1部 英米文化学科 3年 本城ゼミナール ……14

### 2009年度北海学園大学市民公開講座

地域の伝統文化が地域をつくる 寺田 稔……16

### 活躍してます！人文学部卒業生

大学院の窓 塩濱 健児……19

ことばの壁 ……20

研究、その足跡 ……24

編集後記

北海学園大学人文学部

# 退任に当たって

人文学部長 追塩 千尋



この3月で3年間にわたる学部長職を終える。まずは、これまで直接・間接にお世話になったり、ご協力いただいた方々に御礼を申し上げたい。

この3年間の大学に関わることを振り返ると、①認証評価で幕が開け、②若い世代のハシカの流行に神経をとがらせ、③不況の継続と深刻化、④政権交代、⑤新型インフルエンザの流行、といったことがまずは思い浮かぶ。

①は幸いに認定との評価を受け、②も一時的なものであったようで、③は就職状況に影響を及ぼし、④で誕生した新政権がどのような教育・大学政策を打ち出すのか不透明で、⑤は下火になりながらも入試を中心とした大学行事に影響を及ぼしている。②⑤を通じて、これまで余り意識されてこなかった若者の健康管理の問題が浮き上がって来た。

学部にも目を転ずると、認証評価では人文学部は格別問題は指摘されなかったが、掲げている「新人文文学」が注目され、その意味が改めて問われた。次回2013年の評価では教育の質・中身が問われると予想されるので、形骸化させず社会のニーズに対応し得るように育てていくことが重要であろう。そのためにはカリキュラムの充実化が一層推進されねばならない。継続してきた授業改善アンケートも見直しが必要で、カリキュラム充実化に資するものを目指すべきであろう。

2005年度に始まった現行のカリキュラムは、2008年度に完成年度を迎えた。2009年度からは次のカリキュラム改訂に向けての点検・審議が始められた。2009年度からは英米文化学科にも高校地歴の教員免許が認定され、日本文学科とのバランスが推進されている。今後は両学科の特性を生かしながらも、足並みを揃えるべき点を点検し是正していく必要があると思われる。

本学部への志願者は減少傾向をたどりながらも、一定の競争原理が機能する程度の倍率は維持して来た。今後状況はさらに厳しくなるであろうから、より魅力ある学部が求められる。そのための施策は様々あろうし、知恵を絞らねばならないが、止まるところは学生により良い教育を行うことに尽きよう。学生を失望させず、この学部に入って良かったと思わせる教育が求められよう。

本年度は英米文化学科の大塚秀之・栗原豪彦両教授が退職される。在職年数は大塚教授5年、栗原教授7年と長くは無いが、豊かな教育経験を生かして学部・大学院を指導されてきた。ベテラン教員を失うことは学部にとって大きな痛手であるが、お二人のご健康を祈念し、今後とも変わらぬご指導をお願いしたい。

## 転換期の世界

英米文化学科教授 **大塚 秀之**

人文学部5年間の研究生生活は瞬く間に過ぎ去ったという感が強いが、これは、ここ札幌での生活がいかに充実していたかの証なのであろう。「北海道では多くの友人・知人に恵まれ、礼文や知床など各地を訪れて自然を満喫し、ニセコや富良野ではスキーを楽しむなど、充実した生活を送ることができました」とは、今年の年頭に記した挨拶の一節だが、単身赴任の5年間を恙無く送ることができたのは、人文学部の同僚の先生方や事務職員のみなさん、学生や院生諸君、それに札幌に移って来てから知遇を得た多くの友人や知人などのお陰であった。

この5年間はまた、世界史の上でもまれに見る激動の時代、文字通りの転換期の世界であった。アメリカ合衆国をどのように認識するかは、私たち日本の、そして世界の将来と分かち難く結びついている、との思いが強まるようになった20年ほど前から、私のアメリカ合衆国研究は次第に現代に集中するようになり、問題の重要性を意識すると菲才を省みることなくその問題に手を出すようになっていったが、こうした衝動はこの激動の時代に一層強まった。

アメリカ合衆国における金融恐慌に端を発した経済危機、それを背景に誕生したオバマ政権、わが国における長年にわたる自民党政権の崩壊、日米両国で進行する国民生活の急激な悪化などなどの現実を前に、私の研究もまた、アメリカで広がる貧困と格差、GMの破産が象徴するアメリカ型企業社会の破綻、国内では産業の空洞化を引き起こしながらグローバリゼーションを推し進めるウォルマート社、そして、オバマ政権誕生の原動力となった生活破壊と有権者



の怒り、などなどに向けられていった。

オバマ政権の誕生という途方もなく大きな事件はわが国でも強い関心と呼んだから、遠くは函館をはじめ道内の各地から、今のアメリカについて話を聞きたいとお呼びがあり、私もそうした機会を逃さず、そして、講演会が終わった後の懇親会での談論をおおいに楽しんだ。そこから新しい友人も生まれた。

こうして、北海学園大学人文学部の、そして札幌を中心とした北海道の5年間の生活は、あっという間に過ぎ去ったのであった。あらためて、皆さんありがとうございました。

## さらなる発展を

英米文化学科教授 栗原 豪彦

本学にお世話になった七年間は、教育、研究、運営の各面でたいへん有意義なものでした。7年前、皆様に暖かく迎えていただき、恵まれた環境で教育・研究の仕事に専念でき、このたび無事に定年を迎えられるのは、諸先生と事務局スタッフの皆様の温かい支えがあったのことに心から感謝しています。

大学が変わると、以前の前提や座標軸や生活パターンなどをある程度修正せざるをえなくなりますが、本学ではおしなべてよい資質をもった素直で明朗な学生や院生たちに恵まれ、老教師としても親近感をもって接することができました。またゼミの学生たちとの交流を通して、これからの大学教育のあり方などを考える機会をもてたことも幸いでした。また五年ほど前、ブロック大学での3週間の夏季海外研修プログラムに米坂先生とともに学生を引率したことも今では懐かしく貴重な体験です。本誌に寄せられた学生の体験記からも伺えるように、自然豊かな広大なキャンパスでの語学研修は、多様な課外活動ともども得るものが多いもので、今後ともぜひ継続してほしいものです。

私自身の研究上の主たる関心は、若い頃の統語論や統語論と意味論の関わりから年齢とともにより人間くさい語用論へと移り変わり、近年は学説史的な問題に関心が向いています。着任直後の『人文フォーラム』で、「新しい環境のもとで、そろそろ自分なりの座標軸（参照枠）を見定めたい」などと偉そうな抱負を述べましたが、大まかな見通しはあるものの、まだ実現していないのは情けないことです。研究面でたいして成果をあげられなかったのは悔まれます



が、その昔、ミシガン大学で著名な言語学者の故ケネス・パイク先生がいわれた「わたしも一生、勉強だよ」という言葉をかみしめて、今後とも「勉強」は続けていくつもりです。

本学は道内ではもっとも安定した私大ですが、上位の学生の学習意欲を引き出し、全体の語学力などを底上げするためにすべきことはまだあると思われます。今後とも改革をすすめて、一層魅力ある大学に発展してほしいと切に願うものです。

## [時評]

## ハイチの大震災と「植民地責任」

英米文化学科教授 浜 忠雄

10万人とも20万人とも予想される犠牲者。家の失った人150万人。援助を要する被災者は全人口の3分の1にあたる300万人——2010年1月12日ハイチ共和国の首都ポルトープランスを襲った大地震は壊滅的な被害をもたらした。

新聞やテレビは、倒壊した白亜の大統領府や一見して耐震性の低い家屋、重機がないために素手で瓦礫を除去し救出にあたる人々、放置された多数の遺体、広場にあふれた負傷者を手当てする「国境なき医師団」、救援食糧に我がちに殺到する市民など、目を覆いたくなる惨状を伝えたが、それらは、政府機能の麻痺とインフラの欠如のために、医療や食糧などすべてを外国の援助に頼らざるを得ない実態をさらけ出すものだった。

「世界の最貧国の一つ」とも報じられた。数字を列挙しよう。国民一人当たりの収入は年560ドル。貧困線以下人口56%。カナダやアメリカに移住した家族からの仕送りが国家予算にも匹敵する。平均寿命は男性55歳、女性58歳。15歳以上の非識字率55%。安全な飲料水を得られる人の割合37%。適切な衛生施設を持つ人の割合25%。8割の子どもが栄養失調。失業率は70～80%——「エンリエコ活断層」によるマグニチュード7.0の大地震と50回以上の余震の凄まじい破壊力もさることながら、「破滅に瀕した国」「生ける屍の共和国」「破綻国家」などと表現される国状、一言で言って貧困が被害を増幅したと見て間違いない。

「史上最初の黒人共和国」との報道もあった。ハイチは、1697年からフランスの植民地となり、18世紀にはアフリカから強制連行された黒人奴隷を労働力とするプランテーションが発展して砂糖、コーヒーの世界最大の生産地となり、フランスに莫大な富をもたらした所だが、1791年の黒人奴隷蜂起を発端とするハイチ革命の過程で奴隷解放を実現し、さらに、ナポレオンが派遣した精鋭軍隊を打ち破って1804年に独立を達成した。西半球ではアメリカに次ぐ二番目の独立国で、史上最初の黒人共和国でもある。

先駆的な黒人奴隷解放と独立という輝かしい歴史を持つハイチが、現在、極度の貧困にあっていっているのはなぜなのか。ハイチ史を研究する者として、そこには深刻な歴史的・構造的な要因があることを指摘しなければならない。拙著『ハイチの栄光と苦難——世界初の黒人共和国の行方』（刀水書房、2007年）などから摘記する。

第一は、植民地時代のモノカルチャーによる生産構造の奇形化と生態系の破壊、そしてハイチ革命の進展を恐れたフランスが軍事介入したことによる焦土化である。独立後のハイチは植民地支配が残した負の遺産をそのまま引き継いで建国しなければならなかったのである。

第二に特記したいのは、1825年に旧宗主国フランスがハイチを独立国家として承認する見返りに支払いを求めた「賠償金」である。ハイチは年歳入額の10年分にも相当する巨額の「賠償金」支払いに応じたのだが、それは、奴





倒壊前の大統領府と、ハイチ革命を担った数多の黒人奴隷を顕彰する「無名逃亡奴隷の碑」(アルベール・マンゴネーズ作、1987年)

隷革命によって成立した黒人国家を忌避と蔑みの目で見えたアメリカをはじめラテンアメリカ諸国から承認を得られず国際的に孤立した状態から脱出するためだった。だが、その苦渋の選択は経済・社会・政治構造に重大な影響を与えた。「賠償金」支払いのための農業生産の増強を目的に1826年に制定された「農村法」によって、モノカルチャーの温存、農民の土地緊縛と隷農化、新しい階層ヒエラルヒーの導入、地方警察による規律統制の強化がなされた。それは、奴隷制の再導入にも等しい「ネオ・コロニアル体制」だったのであり、国全体の疲弊化と国家権力の肥大化の遠因となった。

第三は、1915年から34年まで続いたアメリカによる軍事占領である。南北戦争後に急速な発展を遂げて「北の巨人」となり1890年前後から「棍棒」と「ドル」をもってカリブ海地域に進出したアメリカは、「ハイチ＝アメリカ製糖会社」などのアグリビジネスを設立して広大な土地を獲得するとともに、財政管理、議会解散などの強硬措置をとり、大統領はアメリカの傀儡と化した。こうして、ハイチ現代史を特徴づける政治・経済の両面での対米従属・依存の構造が生まれたのである。

第四、独立後にたびたび独裁者が現れたが、1957年から86年まで続いたデュヴァリエ親子による独裁政治がその極致である。二院制議会を解散して一党独裁の一院制議会とし、世襲の終身大統領制をしき、「トントン・マクート」の名で知られた大統領直属の準軍組織を使って民主主義を圧殺し、国民大衆のなかで根を張っ

ていたヴードゥー教を逆用して大統領と政府に逆らう者は動物に化身させると脅した。国際法律家協会が「世界中最も浅ましい国の一つ」と呼んだ暗黒の恐怖政治の最大の理解者となったのがアメリカであった。対米従属・依存と独裁政治は表裏の関係をなす。

ジャン＝クロード・デュヴァリエの国外逃亡によって独裁政治が終わってから四半世紀。だが、その後も数度のクーデタで政情不安が続き、治安回復と民主主義の実現、経済・産業基盤の確立とインフラ整備、極貧状態にある国民生活の改善、対米従属からの脱却と主権の確立など、課題は山積したまま今日に至っている。それらは、長い歴史のなかで形成され相互に関連するものだけに、多くの困難を伴う重い課題である。ある研究者は1984年に「はたしてハイチは遠くない将来まで生き延びることができるだろうか」と書いた。大震災は、その懸念があながち杞憂ではないことを明るみにしたと言えるかもしれない。

最近、「植民地責任」という言葉が使われるようになっている(永原陽子編『「植民地責任」論——脱植民地化の比較史』青木書店、2009年)。植民地主義の過去を克服していくうえで、植民地支配を受けた側とそれを行った側との間で明らかにされるべき関係を分析するための新しい概念である。フランスによる植民地支配はもとよりアメリカによる軍事占領と干渉が残したものは、「植民地責任」と表現するしかないものであろう。

大震災の被害を増幅した貧困の要因が上に書いた歴史的・構造的な問題に求められるからには、復興に向けて、とりわけフランスとアメリカの両国がなすべきことは明白であろう。ハイチの前大統領アリスティドが退陣と出国に追い込まれた2004年2月末のクーデタの直後に、アメリカの言語学者ノーム・チョムスキーが述べた言葉を、ここでも引用したい。「アメリカとフランスがまずもってなすべきことは、ハイチに対する莫大な補償を支払うことである。」

(2010年1月21日)

# 国際交流レポート

## 韓国大田大学校への2度目の研修体験

日本文化学科 4年 菊池 有佳子

私は2007年度と2009年度の二度にわたって夏期短期研修に参加しました。

言語の授業は初級・中級の2クラスに分かれており自分のレベルに合わせて学習することができます。大田大学校側の先生達もみなさんとても優しくて私たちが文法を中心に学びたいか、会話を中心に学びたいかなど、要望に応じて授業を進めてくれます。大田大学校の研修では授業の他にも大田大学校の学生と一緒に食事をしたり買い物をしたりする機会があり、授業の他にも語学を学ぶ場が多く設けられています。他にもプログラムとして、ホームステイや大田の美術館や博物館を見学したり、大学内でテコンドー体験など大田を知るプログラムも含まれています。

他にも伝統や歴史が多く残っている全州という町で韓服を着て礼儀作法を学んだり、伝統工芸を自分で作ったり、食事もみんなで作ってみんなで食べるといったプログラムでその土地の方々と触れ合ったり、土地の文化を学ぶ機会が含まれています。また一泊二日のソウル探訪ではソウルタワーに上ったり、景福宮を見学する機会などもあり、滞在先の大田以外にも韓国という国を知るためのプログラムが多く含まれています。毎年種類の異なるこれらのプログラムは、私たち学生の意見を毎年考慮して国際交流

の方々が考えてくださるので、充実した短期研修をすることができます。文化を多く学びたい、歴史に少し興味があるなど少しでも韓国という国に関心があるのであれば、何か明確に学習目的があるととてもいい経験になると思います。

研修自体は3週間とても短期間ですが、韓国という国に触れ知ることができる機会としてとても充実していますし、近年韓国は旅行で行く国としてもとても人気がありますが、旅行の観光などでは知る事のできないことを多く学ぶことができるプログラムになっていると思います。また、この研修が韓国に深く興味を持つきっかけになった学生を多く見てきましたし、このような素晴らしい研修を在学生ののためにもこれからもずっと続けていってほしいと願っています。



伝統的衣装チマ・チョゴリ 2列目右から3人目が筆者

# 私の留学体験記

韓国大田大学校 <sup>チョウ</sup> 趙 <sup>ミ ヒョン</sup> 美賢



皆さん、こんにちは。日本に来て、もうすぐ1年になります。私はこの一年間多くの人々に支えられ、実りある留学生活を送れたことを本当に嬉しく思っています。

今回の留学は私にとって大きな意味があります。言葉も文化も違う他国での生活は考えていたより大変なことでした。特に私が日本に来たばかりの頃は周りに自分の国の言葉を話せる人がいなくてとても寂しい思いをしていました。しかし、そのため私は自分から行動しないと何も始まらないということに気付き、よさこいソーラン祭・十月祭(大学祭)・プレゼンテーション大会などの様々な行事にできるだけ積極的に参加し、たくさんの人々と触れ合うようにしました。それは日本の文化を理解する手助けになり、そのおかげで私は文化や言葉が違ってても心が通じあえば家族のように仲良くなれるということを学ぶことができました。そして、12月に行われたプレゼンテーション大会では、留学生チームとして参加させていただきましたが、発表に到るまで言語の壁にぶつかり、自分の限界を知るきっかけになりました。しかし最後まで諦めずにみんなで力を合わせて一つの目標に向かって頑張った結果、自分たちが納得できるプレゼンテーションをすることができました。

また「ゼミ」にも参加させていただきました。教師と学生が意見を話しあうこの講義は韓国の大学校にはないもので、とても新鮮であり、興味深いものでした。私はこの「ゼミ」を通じてレジメの作り方や発表の仕方、論文の書き方を学び、自分の意見をきちんと伝えることや相手

の意見を聞いて自分の意見と比較し、受け入れることの重要さも知りました。ただ講義で知識を受け入れるだけではなく、学生たちが自ら中心になって授業を作っていくことがとても印象的で楽しかったです。

韓国に帰っても「ゼミ」で学んだことを今後の勉強に活かしたいと思います。

このような貴重な経験を通してこの一年の間、私は自分の未熟さを知り、自分を客観的に見直すことができました。それは自分の国では気付くことのできない価値のあるものだと思います。今年度は韓国からの留学生が私一人しかいませんでしたが、これからはもっとたくさんの後輩たちが留学という貴重な経験を通じて、自分をもう一度見直し、大きく成長して欲しいと願っています。そして日本の学生達も積極的に留学生と交流して他文化を理解してほしいです。そうすると、もっと世界が広がると思います。



小樽水族館にて 右から二人目が趙さん



## カナダ・レスブリッジ大学交換留学記

.....

### 私のカナダ留学

英米文化学科 3 年 **金田 真美**

私にとってカナダ留学は長年の夢で、交換留学生としてレスブリッジに 8 カ月間行くことが決まった時にはとても感動したことを覚えています。一人での長期留学だったので文化・言語共にカナダに深く浸かった環境を楽しみました。

5～7 月は、アジアからの留学生たちと英語の授業を受けました。少人数のクラスで家族のような雰囲気の中、英語はもちろんプレゼンテーションやレポートの書き方など、大学で必要なスキルを学びました。先生方からの指導をうけ、特に苦手だったライティングの力が伸び、英語力に自信がついたのもこの頃です。

9 月からはカナダ人学生と一緒に授業を受けました。社会学など 3 科目を興味深く学びました。楽しみにしていた反面、最初はついていけないか不安でしたが、授業も理解しやすく問題なく参加でき、英語の上達を感じました。休日はカナディアンロッキーを眺め、湖に散歩に行き、友人たちと出かけるなど充実していました。

留学中はホームステイで、カナダの家庭の雰囲気を体験しました。クリスマス等にパーティーを開くなど思い出がたくさんあります。また、ホストの方をはじめ様々な人との交流を通し視野が広がり、人間的にも成長できたと感じます。

この留学は忘れられない貴重な経験となりました。



レスブリッジ大学キャンパス



ウォータートン公園、英語クラスでの旅行 右端が筆者

## 2009 年度レスブリッジ大学夏期日本語コース報告

2009 年度レスブリッジ大学夏期日本語授業は、6 月 12 日から 24 日の期間中、9 回にわたり開講され 15 名の学生が参加した。日本滞在中に日本語で、日本人とコミュニケーションをとりたいという意欲的な学生が多く、その目標に合わせた場面、機能を中心にしたオリジナル教材を作成し、授業が行われた。日本語担当者は、専任教員の他、協力者として本大学の卒業生 2 名、日本語ボランティアの方 1 名が授業運営に参加してくれた。また、日本語教員養成課程の学生たちが会話のパートナーとして授業参加し、活発な学習活動ができた。協力学生との課外活動:カラオケ、北海道神宮、焼き鳥屋などにでかけ、日本語会話で学習したことを実践することができた。(経済学部 神谷順子教授からの報告)

### レスブリッジ大学日本語授業でのアシスタントの経験

英米文化学科 3 年 橋本 瞳

2009 年 6 月に、カナダのレスブリッジ大学からの留学生を対象とした日本語授業にアシスタントとして参加させてもらった。この授業を通して私が強く感じたことは、「日本はやはり恥の文化」ということだった。大学の外国語授業を受けていていつも思うのだが、日本人の外国語学習者は「学ぶ」ということにやや消極的である。例えば、何か聞きたいことがあっても恥ずかしくて先生に質問ができない、間違うと恥をかくから、発音ができないからなどの理由からなかなか発話にいたらない。「学びたい」「外国語を覚えたい」という気持ちよりも「恥ずかしい」という気持ちが先に立ってしまうようである。

それに対して留学生はとても積極的に学習した日本語を使ってみる。わからないことがあれば、どんな些細なことでも質問してくる。発音に不安があれば、大きな声で何度も練習する日本の学生と比べて「学ぶこと」への態度に格段の違いがあり、アシスタントをしていても非常にやりがいを感じた。

「外国語習得の一番の近道は、恥をすてることだ」とカナダの留学生が私に教えてくれたことだ。

### レスブリッジ大学国際交流の協力学生として参加して

英米文化学科 4 年 小林 加奈

私がこの交流に参加したのは国際交流に興味があること、また以前にこのような国際交流に参加してすばらしい経験をし、またこのような機会があれば参加したいと思っていたからです。

初日にレスブリッジ大学の留学生達と初めて顔を合わせる時に、自分のパートナーはどういう人なのかわからず少し緊張していました。私のパートナーは Kristine Lamble というとても明るく、自然が好きで何度か話すうちに緊張は解けていきました。最初の週末には札幌の中心街へ一緒に出かけました。大通りではよさこい祭りを見て、札幌駅や狸小路では買い物をしました。少し雨が降っていたのが残念でしたが、札幌駅と大通りの間を徒歩で移動し時計台を紹介したり、札幌の街を一緒に散策したりしました。彼女はとても興味深そうに眺めていて、楽しんでいただようで良かったです。

生け花を体験する授業ではそれぞれ独創性あふれる作品を作っており、餅つきでは一緒に餅作りを体験しました。最終日には Farewell Party が開催され、留学生達との最後の時間を楽しみました。翌日の出発の見送りは皆が別れを悲しんでおり、このプログラムが留学生、協力学生共に充実したものであったと感じました。

私はこの交流を通して日本の文化や生活を教えるだけではなく、彼らの文化や生活を学ぶこともできました。短い間でしたが、とても充実していたと思います。そして、改めて国際交流の大切さを実感することもできました。もし、皆さんにこのような機会があればぜひ参加して欲しいと思います。



課外活動の一場面



Farewell Party

# 2009 年度サハリン大学学生交換事業 夏期海外研修報告

日本文化学科教授 寺田 吉孝

2009 年 8 月 31 日から 9 月 15 日まで、ロシア連邦サハリン州ユジノ・サハリンスク市にある国立サハリン大学での研修に学生 8 名（内 6 名が人文学部学生）を引率した。

今回の留学は、昨今の学生達の経済状況を考慮し、金銭的負担をできるだけ減らすために、札幌・稚内間を夜行バス、稚内・サハリン間を船で行くことにした。そのため、札幌からユジノ・サハリンスクまで飛行機を利用するのとは異なり、移動するだけで、かなりの体力を消耗した。

今夏のサハリンの天候は悪く、ほとんど晴れることがなく、雨も多く、我々が到着する直前からやっと夏らしい天気になったということである。そして、帰国前日まで、好天が続いた。

学生たちは東洋学部の学生たちの家にホームステイさせてもらい、一方、私は大学の宿舎に泊めてもらった。

稚内からの船が着くコルサコフからサハリン大学のある州都ユジノ・サハリンスクまでは、車で 1 時間ほどかかるのだが、大学はバスを手配せずホームステイ先に各々車を手配するように指示したとのことである。ホームステイ先の方々がこのことを知らされたのは、我々の到着の前日の 8 月 31 日だったということには驚かされてしまう。ところで、来年度以降、サハリン大学で夏季研修を行う場合もホームステイになることが予想されるが、ホームステイ先の重い負担を考えると、札幌からユジノ・サハリンスクまで飛行機を使って移動した方が良いかと思う。付け足しの情報になるが、サハリン大学には、学生寮が 4 つあったようだが、現在は、2 つだけになっている。寮の部屋不足が深刻な問題になっているようである。しかし、大学は財政危機で寮建設のめどが立っていない。

学生たちのホームステイ先は、サハリン大学の学生たちの家（8 軒中 7 軒が集合住宅）だが、親元

から離れて一人で生活している学生のアパートや、親が出張中で不在のアパートや、町の中心部から遠く離れたところにある一軒家等さまざまである。また、ホームステイ先の事情も本当にさまざまである。毎日、授業開始の 2 時間前に学生を大学に送り届ける家庭、晩 8 時まで家を不在にする家庭（学生は鍵を渡されていないので、授業の後、長時間街を放浪せざるをえない）等。食事に関しても様々で、いろんな料理でもてなしてくれる家庭がある一方、自分がダイエット中で、ほとんど食べないので、キュウリとパンしか出してくれないところもあった。

一方、私が宿泊している寮（ここでの名称はホテル）の部屋には、ベッド、机、棚、暖房器がある。台所（冷蔵庫付き）、トイレ、シャワーは他の 5 つの部屋の住人と共用である。洗濯機はないが、その代りに、たらいがシャワー室に置かれている。また、残念ながらインターネットは使えない。ところで、入居当日、トイレが水浸しであった。ロシアではよくあることである。

ロシア語の授業担当はニコラーエヴァ・タチヤーナ・インノケンチエヴナ先生というベテラン教師だった。学生たちのレベルの差が大きく、一斉授業が難しいと予想されたので、助手として、大学院生（女性）が一人つくことになった。しかし、2 回目の授業からはほとんど授業に顔を出さなかった。

サハリン大学では、外国人のための外国語教育は整備されていないようだった。今回の短期研修に關しても、教室は確保されておらず、空いている教室を探して移動する毎日だった。

サハリンは、第 2 次世界大戦後はソ連およびロシア領であるが、その前の 40 年間は日本領、その前の 30 年間はロシア領で囚人島となっていた。さらに、その前は、日本、ロシアと先住諸民族の混住の地であった（清などの大陸の支配下に置かれていた時代もあったが）。そのため、ロシアの伝統文化

サハリン大学が手配した学修項目は、サハリン大学付属考古学博物館、サハリン州立郷土博物館、ロプウエイ、日本センター訪問、北海道サハリン事務所訪問、総領事館訪問、コンサート（チェホフ劇場）、サハリン大学東洋学部訪問である。そのほかに、



今後のサハリン留学の引率者は、以上のことを考慮すると、「とくにロシア語ができなくても、ロシアに関心がなくても良く、日露関係、サハリン経済、アイヌ・ニブヒなどの少数民族などに関心がある人」が適任であろう。

ホームステイ先はそれぞれ違ったが、私のホストファミリーはとても良い人たちだった。両親は朝鮮系のロシア人で、世界大戦前に、日本軍に樺太に連れてこられた人の子供であると教えてもらった。それに関しては、なんだか自分が悪いことをしたような気分になったが、二人とも今をしっかりと楽しんで





サハリンを出るとき、コルサコフまで送ってもらった。仕事があるから早く帰らなければいけないはずだったのに、二人とも、私が出国の管理室に行くまでとどまってくれた。やっぱりとてもいい人だ。もう一度サハリンに行って、また彼らに会いたいと思う。

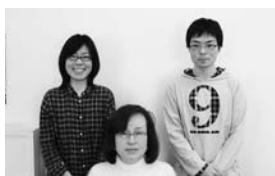
異なる国で暮らすことになると多少なりとも言葉の壁を感じることがあると思いますが、今回の研修でもっとも苦しんだのもこの言葉の問題でした。僕は普段日本語という言語領域で生活しているの



サハリンに行ってからもうすぐ半年が経ちます。そして、一緒に行った仲間の内の2人が卒業します(するはずです)。一緒に行った人が卒業するのを見ると、サハリン研修はもう過去なのだなあと寂しい気持ちになります。木村さん、吉田さん、卒業おめでとうございます。



# ロシア語弁論大会で優勝



左から、佐藤さん、ヴラーソフ先生、藤林君

2009年12月12日(土)、北海道庁赤レンガ庁舎において、日本ユーラシア協会北海道連合会、サハリン州行政府、北海道の3者の主催により、第41回全道ロシア語弁論大会が開催された。Aクラス(5分間スピーチ、質疑応答、詩の暗唱)とBクラス(3分間スピーチ)に分かれて、参加者21名(大学生13名、一般8名)が自分の思いをロシア語でスピーチした。

本学からの参加者4名(全員Bクラス)の内、人文学部英米文化学科2年の佐藤友美さんがBクラス優勝、同学科2年藤林剛士君が同クラス4位の優秀な成績を収めた。参加者4名全員が日頃の学習の成果を発揮して、堂々としたスピーチを披露してくれた。

今回の好成績は、学生達の努力の成果であることは言うまでもないが、熱心なご指導をいただいたタチヤーナ・ヴラーソフ先生とアンナ・サヴィニョフ先生に負うところが非常に大きい。この場を借りて、感謝の意を伝えたい。  
(日本文化学科教授 寺田吉孝記)

## 1部 英米文化学科2年 佐藤 友美



スピーチ中の佐藤さん

今回このロシア語弁論大会に出場するきっかけとなったのは、昨年の夏休みに2週間のロシア・サハリン大学夏期海外研修に参加したことです。

スピーチ内容は初めて日本を出て変わった自分についてのことです。それまであらゆる物事に対して自文化を基準に考えていた私がカルチャーショックを受け、それをきっかけとして変わることができたこと、そして次にまた海外へ行く機会があれば今までとは違う目で異文化と向き合いたいことを3分間でスピーチしました。

発表順が近づいてくるにつれ緊張はピークに達しましたが、発表中は不思議と緊張することなくスムーズに言うことができました。順位は気にせず自分の思いを伝えたい一心で大会に臨んだので、優勝の喜びよりも達成感や充実感の方が大きかったです。

タチヤーナ・ヴラーソフ先生と寺田先生には熱心にご指導していただき大変感謝しています。ありがとうございました。

## 1部 英米文化学科2年 藤林 剛士



サヴィニョフ先生と藤林君

去年の冬に第41回全道ロシア語弁論大会に出場しました。きっかけは夏休みにサハリン留学をしたことで、スピーチの内容もその時のことでした。

弁論大会は初めての経験ということもあり、心配や不安だらけでした。人前に出ることを避けてきた僕にとってスピーチ時間の3分はとても長く感じ、原稿が完成したときは、覚えられないのでは?と心配でした。

しかし、月曜日はアンナ先生、火曜日は寺田先生、水曜日はヴラーソフ先生、と多くの先生方の助けに支えられながら練習し続けました。学校や家での練習はもちろん、通学時がつづつと声を出していたため、すれ違った人は頭のおかしな人がいると思ったことでしょう。

会場となった赤レンガ庁舎の会場が思っていたより広くなかったため、声量の心配もなくなり緊張が少なくなりました。スピーチ時、足の震えは演台のおかげでばれないはず、と思いながらもなんとか全力を出し切れたと思います。暗唱もしっかりできたのでスピーチをし終えたときの達成感はすさまじかったです。

大会の思い出を振り返ってみると意外と楽しく、学生生活にもメリハリが付きロシア語の学習に対するモチベーションが上がったのでとても良い経験でした。

# ゼミ室紹介

## 1 部 英米文化学科 3 年 本城ゼミ



### ゼミ担当者から……………

少し堅苦しい言い方かも知れませんが、大学におけるゼミとは学生が自分の知的可能性を発掘する場だと思います。自分の内部をみつめ、仲間と検討しあうという経験は、単なる自分探しにとどまらず、世界の中で生きる自分というテーマにつながるからです。とはいいながらも、時にはゼミ・コンで楽しく交流する事も大事。

(本城 誠二)

### 学生から……………

■本城ゼミでは、まずアメリカ文学や音楽の歌詞の翻訳などを通し、アメリカ文化の様々なジャンルに触れます。そしてその中で自分の興味のある分野を見つけ、自分自身の研究テーマとして詳しく調べていけるので、学生が意欲的に学習することが出来ると思います。

(渋谷 優衣)

■本城ゼミは最終的な卒業研究につながるテーマについて発表する機会が数回あり、他のゼミと比べると大変かもしれませんが、やりきったときの充実感はひとしおだと思います。本城先生の専門はアメリカ文化で、自分の研究テーマでもあるアメリカ音楽にもとても造詣が深いです。もしアメリカという国のことについて興味があるなら本城ゼミをお勧めします。また、本城先生のホームページやブログも是非一度チェックしてみてください。

(福井 秀行)

■アメリカの文化について勉強しています。今年は代表的なアメリカ文学の冒頭部分・歌詞を訳し、同時にその文学と歌詞が生まれた時代背景を調べました。さらに映画、食文化、スポーツ、黒人文化、競馬などなど、学生が自身でテーマを設定し、各自研究し、ゼミ内で発表・卒研制作をします。発表や授業を通して、現代のアメリカにある様々な文化やそれらの背景を知り、日々発見と驚きの連続です。

(野村 彩夏)

■本城ゼミで、大好きな映画について研究しています。今までは映画を娯楽としてしか観ていません

でしたがゼミでの研究を通して、その国の文化を映す鏡としての役割も果たしていると捉えるようになりました。今期の演習では、原節子とマリリンモンローを比較して、日米女性像の違いをレポートにまとめました。卒業研究では、日米の文化の違いを、映画を観て研究していくつもりです。

(橋本 瞳)

■このゼミではアメリカの文学・映画・音楽などの文化を学んでいて、本城先生のアメリカで過ごした話なども授業中に聞くことができ、アメリカに興味のある私にとっては、とてもためになるゼミだと思います。授業中はみんな真面目に学びながらも、和気あいあいとした雰囲気でもとても楽しいゼミです。

(高橋 千明)

■私たちのゼミは、男子6人、女子5人で、とても良いバランスのとれたクラスです。授業中に発言する時はみんなそれぞれの意見を自信を持ってできるメンバーです。先生を含め個性的な人が多いので毎回楽しく授業をしています。もちろん雑談もする、なごやかなムード漂うゼミです！

(本間 はつみ)

■メリハリのある授業。それが本城ゼミの良いところです。学ぶ時は学ぶ、楽しむ時は楽しむ。時折聞ける本城先生のNYこぼれ話は私たちの興味をより引き立たせてくれます。アメリカ文化に興味のある学生は是非！

(櫻井 晋一郎)

■基本的にのんびりとした、扱うテーマも様々で楽しいゼミです。卒研もかなり自由にテーマ設定できます。たまに美味しい菓子を食べ、茶を飲みながら雑談をする事もあります。先生はお酒好きです。

(阿部 航大)

■本城ゼミは本城先生を筆頭に個性派揃いです。ビートルズが好きな人がいたり、映画が好きな人がいたり、競馬が好きな人がいたりそれぞれですが、皆に共通して言えることアメリカが好きという事です。楽しくアメリカ文化について学びたかったら、ぜひ本城ゼミへ。

(近澤 卓哉)

■オバマ大統領の就任演説、『グレート・ギャツビー』、R & Bの歌詞など、様々なタイプの文章を原文で講読し議論をしました。特に印象に残っているのは1950年代のアメリカを代表する小説『ライ麦畑でつかまえて』を原文で講読したことです。初めて原文に触れ、自分で訳し他のゼミ生の解釈を聞くことで作品の理解がより深まりました。ゼミもコンパの雰囲気も良いです。

(西元 良太)



## 2009 年度 北海学園大学 市民公開講座 「住民参加による地域づくり」

2009 年 10 月 10 日・11 日に、上記のテーマで開催された市民公開講座の中から、本学部の寺田 稔教授の講演内容を要約してお伝えします。

### 地域の伝統文化が地域をつくる

日本文化学科教授 寺田 稔

#### はじめに

北海道の諸地域では、それぞれの地域の風土やそこに暮らす人々の地域への係わりなどから個性豊かな地域の特色（地域性）が形成され、同時に人々の暮らしや生産活動、さらに地域資源などとの関係から地域の伝統文化が構築されてきた。今回は、十勝支庁と空知支庁における地域農業の特色とそこに構築されている地域の伝統文化について紹介し、さらに地域の伝統文化や地域資源を活用した地域づくりについて考えてみたい。

地域づくりには、外部から持ち込まれた住民不在の「外発的地域づくり」と住民が主体的に参加しながら地域の伝統文化や地域資源を活かした「内発的地域づくり」がある。経済活動の低迷と人口の減少が地域の活力を沈滞させ、地域格差の拡大が叫ばれている今の時代こそ、「内発的地域づくり」が重要である。

#### 十勝支庁の農業と伝統文化

十勝支庁の農業は、広大な耕地での小麦・てん菜・ばれいしょ・豆類などの畑作物と野菜類の大規模栽培、広大な牧草地での牧草の栽培、さらに乳用牛や肉用牛の多頭飼養などが混在した土地資源活用型の農業であり、日本で最大の食料供給基地である北海道農業の中心的役割を果たしている。



十勝支庁では、畑作物（原料農作物）の大規模栽培と家畜の多頭飼養とが混在する農業経営上の特質と大正 9 年に製糖工場が操業を開始したことなどを背景に、地元で生産された農畜産物の加工事業が古くから盛んであり、ものづくりの文化（農畜産物の加工文化）が構築されている。十勝支庁で操業している主な食料品製造企業は、日本甜菜製糖(株)、士幌町農業協同組合合理化澱粉工場、JA 士幌、カルビーポテト(株)、JA おとふけ食品(株)、日本罐詰(株)、雪印乳業(株)、明治乳業(株)、森永乳業(株)、よつ葉乳業(株)などである。一方、十勝支庁では、昭和 60 年代から酪農家の小規模なチーズ工房での手作りチーズの生産が盛んになり、「十勝ブランド」に認証されているチーズ工房を中心に個性豊かなナチュラルチーズの生産が盛んである。また、十勝支庁では、地元で生産された豆類や砂糖などを原料に多くの和菓子や洋菓



子が生産され、北海道を代表する菓子の製造企業（六花亭や柳月など）が操業している。

以上のように十勝支庁では、地元で生産された農畜産物を原料に多様な食料品を生産する「ものづくりの文化」が古くから構築されており、それが地域経済の発展を支えている。

## 空知支庁の農業と伝統文化

空知支庁の農業は、1920年代以降、用水池や用水路などが建設されて農業の基盤整備が進展し、北海道を代表する稲作地帯として発展してきた。しかし、空知支庁は、減反政策以降、野菜類・そば・花卉など多くの転作作物が導入され、稲作を中心に野菜類・そば・果実・花卉などを栽培する極めて多様性に富んだ農業地域に変貌した。

空知支庁は、札幌市や旭川市に近いという位置的有利性を活かして農産物の直売所や観光農園、さらに農業体験施設などが数多く存在し、農業を通じて農村と都市とが交流するグリーンツーリズム文化が構築されている。空知支庁では、地元で栽培された新鮮で多彩な野菜類を料理して直接お客様に提供する「ファームレストラン」が札幌市に近い長沼町・由仁町・南幌町などに9店あり、農作物の栽培と結びつけた食の生産・消費文化が構築されている。空知支庁では、ブドウの栽培に適した自然環境を活かして醸造用ブドウの生産量が拡大しており、地元で収穫したブドウを原料にワインを生産するワイナリーが6軒ある。最近、空知支庁では、ブドウの品種や栽培方法を学びながらワイナリーを巡るワイナリーツアー文化が構築されつつある。

以上のように空知支庁では、農業を通じて農村と都市とが交流するグリーンツーリズム文化、農作物の栽培と結びつけた食の生産・消費文化、ブドウの品種や栽培方法を学びながらワイナリーを巡るワイナリーツアー文化など多彩な地域文化が構築されている。

## 伝統文化が地域をつくる

内発的地域づくりは、地域の伝統文化や地域

資源を活用することによって、良好な生活環境や経済的豊かさが享受できる地域社会の形成を目指すものである。内発的地域づくりは、誰でもが参加できる住民参加型の地域づくりであり、多くの住民の参加によって地域住民の共通意識の形成と連帯感の強化が期待できる。

内発的地域づくりでは、諸地域における個々の伝統文化を連携させることによって、他の地域には無い個性豊かで魅力的な新たな地域文化を構築することが不可欠である。その理由は、個性豊かで魅力的な新たな地域文化の構築が他の地域の人々との交流を活性化させて交流人口を増大させ、交流人口の増大が定住人口の拡大へと発展する可能性があるためである。

内発的地域づくりでは、諸地域におけるものづくりの伝統文化と地域資源（農産物や水産物などを含む）とを有機的に結合させることによって、個性豊かで魅力的な新たなシステム化された商品を開発することが不可欠である。その理由は、個性豊かで魅力的な新たなシステム化された商品の開発と販売が個々の地域資源の価値を高め、さらにその需要を拡大して地域経済の発展を促す可能性があるためである。

上述した地域づくりを推進するためには、行政の果たす役割が極めて重要であると考えている。行政の果たす役割は、地域の伝統文化や地域資源、さらに地域づくりに関する情報を積極的に収集し、その情報を地域住民と共有しながら一元的に管理し、さらにその情報を有効に活用できる場を地域住民に提供することである。さらに行政は、伝統文化や地域資源を活かした地域づくりを推進している地域住民に対して、住民相互の連携の手助けや技術的・経済的支援の手助けをすることが重要である。





# 活躍してます！人文学部卒業生

第13期生の丸山聡子さんが、評論「なつかしさと『太陽』——有島武郎『或る女』論」で、平成21年度の札幌市民芸術祭奨励賞〔評論部門〕を受賞しました。表彰式は2009年11月21日に札幌市教育文化会館で行われ、笑顔の丸山さんと再会できました。

なお、受賞論文は札幌市民芸術祭実行委員会刊「さっぽろ市民文芸」第26号（2009年10月刊）に収録されています。書店や図書館等でどうぞご覧ください。（日本文学学科准教授 田中 綾）

## 平成21年度 札幌市民芸術祭奨励賞〔評論部門〕を受賞して 丸山 聡子 （日本文学学科 2009年卒 第13期生）

大学を卒業し、早1年が経ちました。振り返ってみると、文化や音楽、友人、そして勉強の面でもいろいろな出会いがあったと感じています。その中でも、卒業論文は思い出に残る課題のひとつです。本を読むことが好きという理由から、文学を扱うゼミで2年間を過ごしました。ゼミでは、テキストを読み、発表や意見の交換をすることで自分の考えを表現する難しさや、様々な方向からの読み方を学びました。卒業論文を考える時期になり、近代なら有島武郎、現代だったら伊坂幸太郎という二択に悩まされましたが、北海道にゆかりのある作家であること、主人公「葉子」の女性像に興味をもったことから、有島の『或る女』について書くことを決めました（ちなみに、伊坂幸太郎は作品間のリンクや登場する音楽の関連性など調べてみると非常におもしろいです）。

卒業論文では、『或る女』のエピグラフであるホイットマンの詩、有島による『自筆廣告文』との関連性から、主人公である『葉子』を救うものは何かを明らかにする」という目的で研究に取り組みました。有島作品は、「生」や「本能」、生きていることに関する描写が豊かに表現されており、また冒頭にホイットマンの詩が掲げられていることが多くあります。そのような作品内容と詩の関係性を調べてみるのも、有島作品の魅力を知るひとつの手がかりではないかと思っています。

論文を進めていく上で、大幅な方向転換や新たな資料の発見など、見えかけていたゴールが曇気楼だったということも多々ありましたが、なんとか結論までたどり着きました。

論文は書き終えることができましたが、もっと読みたい文献や有島の生い立ちなど調べるべき課題があると感じていました。そのとき、田中先生から今



回の「さっぽろ市民文芸」のお話を聞き、ぜひもう一度『或る女』について書きたいと思ったのです。また、卒業論文を書くにあたり、決めた目標のひとつ「読む人が苦にならないような文章を書く」を思い出しました。卒業論文を書いているときには、分量を意識しすぎ、あまりこの目標を達成することはできませんでしたが、改めてポイントにあった文章、長くなりすぎない表現を選び、有島の作品の魅力を伝えるにはどうすべきか考えました。「さっぽろ市民文芸」応募のための卒業論文の書き直しは、やはり読むべき参考文献がたくさんあることを痛感しつつ、より深くテーマについて考える良い機会になりました。

応募の結果「さっぽろ市民文芸」の誌面に掲載させていただき、応募者と市民の方々との集いに参加できました。今まで自分が書いた文章は、学内の課題で先生やゼミの仲間に発表するという機会はありませんでした。しかし、今回の集いでは、初めて会う方々から感想をいただき、大げさではありませんが、自分の文章が知らないところで誰かと出会っていることに驚きと嬉しさを感じました。

大学生生活、日常生活において自分の知らないおもしろい世界というのはまだまだ広がっています。そのような何かに出会うべく、視野を広くもって行動していくことの大切さを改めて感じています。

# 大 学 院 の 窓

## ことばの壁

文学研究科 英米文化専攻 修士課程 1 年 塩濱 健児



大学院進学から瞬く間に一年が経ちました。頼りにできる先輩や新たな友人もでき、毎日充実した日々を過ごしています。とはいえ、この一年は悪戦苦闘の日々でもありました。わたしの場合、大学院の講義・演習では、英語ないしドイツ語のテキストを読むことが多いのですが、その度に、(ドイツ語については特にそうですが) 砂を噛むような思いをしています。心が折れそうになりながらも、先生方が英語やドイツ語をスラスラと読んでいるのを羨望のまなざしで見つめ、「先生方もきっと努力されたのだろう」と学部での演習での経験を思い起こして、みずから奮い立たせています。

学部の演習では、フランクリン・バウマーというアメリカの思想家の西欧思想史に関する著書を原文で読み、翻訳するという作業を行いました。その際、何よりも正確に読むことを重視して、文法的に正確に読むと同時に、著者の意図を考慮しつつ意味を理解することを目指しました。最初は意図を汲み取るどころか、文法すら曖昧な状態でしたが、コツコツと勉強続けた結果、半年、一年と経つにつれて、徐々に英文を読む力が身に付いてきているのを実感できるようになりました。学部を卒業する頃には、少なくとも、何を意図し意味しているのかを考えながら読む余裕を持てるようになっていました。また、意味を深く理解するのに、その背景的な知識も必要とされたことから、関連する欧米の文学、歴史、哲学なども学ぶことができました。翻訳するというのは非常に手間のかかる作業ではありますが、欧米のことを学ぶとき

には避けて通れない道なのだと思います。その手法は日本語のテキストを読む場合にも適用可能なものであると思います。

この一年間、歯痒い思いをしながらもドイツ語のテキストを読み続けた甲斐あって、ドイツ語の力はかなり改善されたと思います(元がゼロに等しいこともあります)。まだ文法的な側面だけでも正確というには程遠いものですが、原文を正確かつ速く読むことができるように日々努力して、論文完成へ向けて邁進していきたいと思います。

■学会・研究発表

上野 誠治

「ヴェルネルの法則の記述について」10月、日本英文学会北海道支部第54回大会、北海道教育大学函館校

須田 一弘

「オーストロネシアンに取り残された人々：バブアニューギニア内陸部と沿岸部の人々の生活」11月15日、国立民族学博物館共同研究会『人類の移動誌』、国立民族学博物館

SUDA Kazuhiro “Marine Resource Use in Transition: Traditional and Modern Fishing in Tonga, Western Polynesia” 12月4日、19th Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association, Vietnam Academy of Social Sciences Conference Centre, Hanoi, Vietnam

常見 信代

「K.Hughesの修道院教会論をめぐって」9月、「21年度第2回中世ブリティッシュ・ヒストリー研究会」、北海学園大学

手塚 薫

「小氷期や自然災害が千島アイヌに与えた影響」7月、日本文化財科学会第26回大会、名古屋大学

「千島列島における資源・土地利用の変遷—集落・居住形態の進化パースペクティブから—」9月、第11回日本進化学会大会、北海道大学  
「千島列島における資源・土地利用の歴史—国際調査(KBP)の成果から見えてきたもの—」12月、北海学園人文学会第二回例会、北海学園大学

テレングト・アイトル

「關於十三世紀元朝侵略日本和日本仙台的“蒙古碑”」(2009.7.30) 国際人類学与民族学聯合会第16届大会・昆明雲南大学・中国 2009年7月27-31日。(The 16th World Congress of the International Union of

Anthropological and Ethnological Sciences.“2009 IUAES” Kunming China. July 27-31, 2009.)

「概念としての文学——起源における東西詩学の伝統の相違をめぐって——」(2009.10.25) 東アジア詩学と文化相互解読国際学術シンポジウム、中国・天津師範大学 2009年10月24-25日。

中川かず子

「中国人学習者と日本人教師の日本語学習に対する意識—学習者の価値観、面子の学習姿勢への影響」(共同発表) 7月、The JSAA-ICJLE 2009 International Conference、ニューサウスウェールズ大学、オーストラリア

■著作・論文など

著書

テレングト・アイトル

(共著)「一三世紀“蒙古襲来”和“蒙古之碑”—關於日本生死観的鎮魂和怨親平等」王晓平編『東亜詩学与文化互読』(中国語)、中華書局・中国、2009年10月(206-228頁)。

論文

井上 真蔵

「異文化接触としての姉妹都市交流—日本とカナダの事例から考える」、『開発論集』第84号、北海学園大学開発研究所、2009年9月。「転換期にたつ姉妹都市交流—交流成果を明日に架ける橋に」『北海学園大学学園論集』第141号、2009年9月。

岩崎まさみ

「沙流川流域を変えた二つのダム建設」(共著)『みんなく実践人類学シリーズ7』岸上伸啓(編)証書房 pp.157-182

桑原 俊一

「アトラ・ハシース叙事詩(Atra-hasīs)(1)」7月『北海学園大学人文論集』第43号、北海

学園大学人文学部

#### 田中 綾

「歌人・逗子八郎研究(二)」7月、『北海学園大学人文論集』第43号、北海学園大学人文学部、114-130頁

#### 常見 信代

「ストラスアーン伯と『ノルマン・セツルメント』」『国学院経済学』3月、第57巻第3・4合併号(永井教授退官記念号)、39-82頁

#### 手塚 薫

「千島列島の国際学術調査最前線」7月、『千島列島に生きる アイヌと日露・交流の記憶』、北海道立北方民族博物館

#### テレングト・アイトル

「近代の衝撃と海——鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチョンガによって表象された『海』——」(中一統Ⅱ)『人文論集』北海学園大学、第43号、2009年7月(81-112頁)。

「概念としての文学——起源における東西詩学の伝統の相違をめぐって——」『年報・新人文文学』(第6号)北海学園大学大学院文学研究科、2009年12月(42-131頁)。

#### 中川かず子

「実用日本語講座—日本人と日本語」7月号「敬語とコミュニケーション(2)」◇8月号「日本人と受身」◇9月号「日本人の心情を表す副詞(1)」◇10月号「日本人の心情を表す副詞(2)」◇11月号「日本人らしさと慣用表現(1)」◇12月号「日本人らしさと慣用表現(2)」—『月刊日本語ジャーナル韓国／台湾版』、Darakwon Co.／鴻儒堂出版

#### 米坂スザンヌ

Practical phonetics for language learners: Evaluating a blended course. 7月「北海学園大学人文論集」第43号、北海学園大学

人文学部

#### ■研究費研究

##### 手塚 薫

科学研究費補助金 基盤研究(C)「千島列島における資源・土地利用の歴史生態学的研究」(研究代表者 手塚薫)

総合地球環境学研究所研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」(研究班員 手塚薫)

開発研究所総合研究『分権型社会における地域自立のための政策に関する総合研究』(研究参加者 手塚薫)

#### ■講演など

##### 井上 真蔵

「事例に見る効果的な姉妹都市交流推進のヒント」第18回北海道・カナダ姉妹都市会議基調講演、札幌プリンスホテル(国際館パミール)、2009年6月11日。

##### 追塩 千尋

「神仏習合と神の機能—無住の著作を中心に—」、2009年10月30日、駒澤大学仏教文学研究所主催(於駒澤大学)

##### 須田 一弘

「生態人類学の視点から考える開発と環境問題」10月28日、えべつ市民環境講座、江別市野幌公民館

#### 田中 綾

「対決！ 現代短歌の前線 北海道vs九州」[パネリスト]7月、現代歌人協会、学士会館

「オノマトペ短歌を楽しもう」8月、高文連道南支部文芸専門部、函館市中央図書館

「啄木と九州の現代歌人たち」9月、札幌啄木会、社会福祉総合センター

「深田久弥の青春短歌」12月、労文協リレー講座、北海道自治労会館

**手塚 薫**

「千島列島へ人はいかに居住したか：国際千島調査（IKIP・KBP）の成果から」特別展関連講演会『千島・北海道交流史』7月、北海道立北方民族博物館（主催・会場）

■評論・エッセイなど

**池内 静司**

（エッセイ）「T.S. エリオットと『パーント・ノートン』」4月、『図書館便り』第31巻1号、北海学園大学附属図書館  
（シンポジウム講師）「T.S. エリオットのハムレット論」（シンポジウム：『ハムレット』—その時代と今—）10月、日本英文学会北海道支部第54回大会、北海道教育大学函館校

**岩崎まさみ**

（エッセイ）「捕鯨者たちの大宴会〈ゴンドウクジラ〉」『月刊みんぱく 2010年1月号』

**大石 和久**

（シンポジウム報告）「東アジアにおける芸術文化と生活」9月、『広島芸術学会報』104号、広島芸術学会  
日本映像学会第35回大会・研究発表要旨  
「持続と瞬間——写真とベルクソン哲学」10月、『日本映像学会報』148号、日本映像学会

**小野寺静子**

（エッセイ）「古典散策 万葉集巻四・六五〇～六五二」2月、『藝林』72巻2号、藝林短歌会  
（辞典）  
『万葉集神事語辞典』5項目担当、[http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbTop.do?class\\_name=col\\_dsg](http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbTop.do?class_name=col_dsg)

**桑原 俊一**

（エッセイ）「私が薦めるこの一冊：森有正『バヒロンの流れのほとりにて』」『図書館だより』第31巻2号、北海学園大学附属図書館

**田中 綾**

（書評）福島泰樹著『悲しみのエネルギー』（三一書房）、『図書新聞』10月10日  
森井マズミ著『不可解な殺意』（ながらみ書房）、日本大学国文学会『語文』135号  
（評論）「ちはやぶる対位法」『文藝月光』1号  
◇「石原吉郎を視た夏」『かでる』60号◇「深田久弥の青春短歌」『路上』115号  
（エッセイ）「旧制一高青春の短歌——深田久弥」『草蔵』46号◇「森鷗外『うた日記』が視たもの」『草蔵』47号◇「小嵐九八郎さんのこと」『草蔵』48号◇「啄木と弥生小学校」『北海道新聞』夕刊10月7日◇「対決！ 現代短歌の前線 北海道 vs 九州」『現代歌人協会会報』120号◇「選評〈評論〉」『さっぽろ市民文芸』26号  
（連載）「書棚から歌を」『北海道新聞』11月15日◇11月22日◇11月29日◇12月6日◇12月13日◇12月20日  
（連載）「歌壇選＋コラム学生の歌」『朝日新聞』道内版 7月9日◇7月23日◇8月13日◇8月27日◇9月10日◇10月1日◇10月15日◇10月29日◇11月12日◇12月10日◇12月25日

**手塚 薫**

（エッセイ）「千島列島をめぐる船旅から」8月、『人文フォーラム』31、北海学園大学人文学部

**寺田 吉孝**

（翻訳）「アイヌ語・ロシア語辞典（6）」2009年12月、『北海学園大学学園論集』142号、北海学園大学学術研究会

**中川かず子**

「北海学園日本語教育研究会について」9月、『学報』9月1日号、北海学園大学◇「米国ノースイススタン大学日本語・日本文化研修講座実施」9月、同上



■その他

**田中 綾**

第7回全道高等学校文芸研究大会〔作品選考とワークショップ〕、10月、ホテル万惣（函館市）

**寺田 吉孝**

第41回全道ロシア語弁論大会審査員、2009年12月、日本ユーラシア協会北海道連合会・北海道・サハリン行政府主催、北海道庁赤レンガ庁舎

**中川かず子**

第38回全北海道学生競技ダンス大会新人戦、会場運営責任者、8月、北海学園大学体育館◇  
第42回全北海道学生競技ダンス大会全道戦、大会会長、12月、藤女子大学花川キャンパス体育館

## 編 集 後 記

今回の編集をもって、新委員と交代します。この２年間、フォーラム作成にいろいろとご協力くださり、ありがとうございました。  
(菅 泰雄)

編集委員の１年目を終えようとしています。やっとフォーラム編集の作業の段取りが分かってきたところです。一人前の編集ができるように訓練中です。先生方のご協力に感謝。  
(桑原 俊一)

**人文フォーラム 32**：2010 年 3 月 5 日発行 編集人：菅 泰雄、桑原 俊一 発行人：追塩 千尋  
発行：北海学園大学人文学部(札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161) 印刷：(株)アイワード



表紙「装轡」図

彩色、26.7 × 38 cm (間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』坤所収 北駕文庫所蔵)

間宮林蔵(安永9[1790]—天保15[1844])は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地(樺太)探索の幕命を受け、文化5(1808)年から翌年にかけて、東海岸は北知床岬まで、また西海岸は北上して間宮海峡を確認、更に北端近くまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助(秦貞廉)が挿画を加え編輯したものである。

北駕文庫所蔵、乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界余話』と題して、文化8(1811)年に幕府へ献上された貞助自筆本(国立公文書館内閣文庫所蔵)に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られてないが、安政2(1855)年刊の流布本『北蝦夷図説』を始めとして多くの伝写本がある。

この図は『東韃圖記』坤巻の巻頭「産業部」の「使犬」に収められている。本文冒頭に「此島の夷生産の第一事となす者は使犬なり」と書かれているように、犬は生活・生産手段の要となる存在であった。各家が5～6頭から12～3頭の成犬を飼いき、家族のように世話し撫育する様は「實に小児を養育するが如し。故に犬の夷を慕う事も亦嬰兒の母を慕ふがごとく……」とある。役割については「其用いる處は舳(文中表記「舳」)を挽しむるを第一とし又船を挽きしめ其他山獵の助となす事許多なり」とあって、轡は冬季の交通・運搬に不可欠であった。画は装轡時に、挽事を悦び早る犬をまず植木に連繫しておく場面である。「調装やふやく成て後植木の縄を解くを不待して馳出す事矢の如し」と、晴れの出番を待ち切れずに飛跳ねる犬達が何とも微笑ましい。(北駕文庫 佐々木光子記)